

平成 28 年度 第 58 回

西日本地区教員研修会

期日 平成 28 年 5 月 27 日(金)

会場 奈良学園小学校



日本私立小学校連合会
〒102-0073
東京都千代田区九段北 4-2-25
私学会館別館 6 階
電話 03 (3261) 2934

第五十八回西日本地区教員研修会が、五月二十七日(金)奈良学園小学校を会場として、一〇六〇名の参加者を迎え開催されました。平成二十八年度は、広島県の英数学館小学校が再加盟され、西日本地区の加盟校が六〇校となりました。

奈良学園小学校は、新しい時代を積極的に切り拓き、世界をリードする「高い志を持った人材」の育成を目指し、平成二十年四月に自然豊かな「関西文化学術研究都市」に繋がる奈良市登美ヶ丘に創立されました。

建学の精神「自ら生きて、活きる」を礎とし、「三本の柱」「和の精神を大切にする」「遅く生きる力を育む」、「科学的に物事を見る力を身に付け

西日本地区教員研修会を終えて

西日本私立小学校連合会

会長 山本義和

を考え実践されています。

更に、「尚志・仁智・力行」(しゅうし・じんち・りょっこう)という

「ことを学
園教育目標に
掲げ、子ども
の発達段階に
合わせた小中
高十二年一貫
教育システム
四一四一四制



「校訓」のもと、将来が見える中での今の頑張り、自分の足跡を確認しながら「もう一歩先」を上手に教育実践されておられます。

研修会では、午前中に行われた公開授業では、全学級で研究主題に沿い、質の高い授業が行われました。子どもたちの学ぶ姿勢がすっかり身につけていて、心身・学力の向上に、児童と教師が一体となつて取り組んでいる様子がうかがえました。

開会式では、西私小連会長挨拶。そして、会場校の古川謙二校長先生の心のこもったご挨拶の後、私立小学校勤続三十年の永年勤続者の表彰が行われ、祐津芳信・原山稔郎・石倉哲也・清水正志・荒井祐子・山崎晃・藤田恵子・竹下貴・岡森祐・寺井智子・重田庸子の十一名の先生方が表彰されました。受賞者を代表して、祐津芳信先生が謝辞を述べられ、三十年間の思いに一同感動いたしました。

第 58 回
西日本私立小学校連合会教員研修会



楽合奏をきかせていただきました。また、合唱「地球星歌」笑顔のため「く」は、子どもたちの美しい歌声と歌詞が合わさつてとても感動的でした。

の大切さ・感謝の心・命の大切さを伝えていただきました。

午後からは、校長会や十四分科会に分かれての授業研究や提案発表、講演などが熱心に行われ、明日からの教育実践に役立つ、実り多い研修会になりました。

最後になりましたが、会場校をお引き受けくださいました古川謙二校長先生をはじめ、教職員、学校関係者の皆様には心からお礼申し上げます。

国語部会

美しい日本語を育む

国語授業の創造

谷内 直子 (雲雀丘)

国語部では、「美しい日本語を育む国語授業の創造」という主題のもと、低学年・中学年・高学年の三年の公開授業とその事後研究会に加え、提案発表、講演会を行った。

低学年の公開授業は、一年生の「群読を楽しもう」(佐々木扶実子先生)。

「おがわのマーチ」の詩を題材に、言葉から想像を膨らませ、それを話し合いながら群読に生かしていく授業だった。一年生の五月という段階であっても、子どもたちが「みんなが群読でつきたいことばの力」を意識していたこともすばらしかった。

中学年の公開授業は、四年生の「新聞を作ろう」(原野潤子先生)。新聞記事に見出しをつけることを通して、工夫された表現方法に気づかせることがねらいの授業である。児童は、しかの赤ちゃんが誕生したという内容の記事に、グループで話し合いながらよりよい見出しを考えていた。キーワードの抜き出し方を指導され、ていねいな取り組みだった。

また、新聞記者の方をゲストティーチャーとして招き、アドバイスをいただいたことも児童にとつてよい機会となつていた。

高学年の公開授業は、五年生のブックトーク「千年の釘にいどむ」。アクティブラーニングを意識したブックトークの授業を見せていただいた。児童はグループごとにテーマを見つけ、そのテーマをつないで三冊の本を読み、ブックトークを行っていた。事後研究会でも、活発な意

見が交わされ、今後の課題もさぐる
よい話し合いができた。

提案発表は、佐々木扶美子先生(奈良
良学園小学校)による「ブックト
ク学習活動の実践より」と題して、
学校の国語科として一昨年度から取
り組んでおられる実践をうかがつ
た。ブックトーク学習の取り組みに
おいて児童は学びの連続性を意識し
て書くことができ、その活動で「読
む」「書く」「話す」「聞く」の力を

複合的につけることができるという
ことを二年間の実践から知ることが
できた。発達段階に合わせ、言葉
の力を段階的に付けていく児童の姿
が見られた。

そして、その奈良学園小学校の実
践の理論的な裏付けとなる、兵庫教
育大学大学院教授の堀江祐爾先生に
よる講演「ブックトーク学習活動と
アクティブラーニング」をうかがつ
た。いろいろな側面のあるアクティブ

ラーニングであるが、今
回の公開授業を例にしたお
話や様々な実践の紹介から
も、「年間を通してつけた
い力や、単元を通してつ
きたい力を子どもたちと考
える」、「子どもに黒板を開放
する」など、たくさん
のヒントを与えていただいた。
児童に「言葉の力」を付
けるための一つの手段とし
てのブックトーク学習活
動。そこから私たち国語の
教員が学ぶことは大変多
く、今後の教育活動に生か
していきたいと感じた。



社会部会

子どもがいきる

社会科の授業づくり

山田 元樹 (帝塚山)

今年度の西日本私立小学校連合会
研修会は奈良学園小学校で開催され
た。午前中に二本の授業が公開され
午後からは講演会、授業研究会、提
案発表が行われた。

【公開授業および授業研究会】

◇「奈良県のくらし (四年生)」

授業者 山川 丈二
(奈良学園小学校)

吉野の地場産業である手漉き和紙
を教材に、一三〇〇年続いた和紙
作りの秘密に迫る授業であった。授
業の後半ではゲストティーチャーと
して福西氏が登場して教室が沸い
た。

その後の授業研究会では、「本物」
の手漉き和紙職人に出会うことで変
容していく子ども達の姿について議
論された。

◇「天下統一と江戸幕府 (六年生)」
授業者 横瀬 鑑
(奈良学園小学校)

江戸幕府がどのようにして大名を
支配していったのかを「加賀藩大名
行列絵屏風」の資料をもとにして紐
解いていく授業であった。授業では
様々な立場、様々な観点で、子ども
達にもその見方や考え方をとらえさ
せる工夫がちりばめられていた。

その後の授業研究会では、資料の
提示方法についての意見交換がなさ
れた。さらに地域に根ざした教材づ
くりについて議論する機会も得るこ
とができた。

【講演会】

◇「本物の技を残し伝える

〜次の千年のために〜

講師 福西 正行 氏
(吉野手すき和紙職人
福西和紙本舗六代目)

国宝や文化財の修復に必要な和紙
の製作に携わっている福西氏にご講
演いただいた。今でも昔ながらの方
法で和紙を製作されている。「目で
みて体感して覚えろ」という先代の
教えのもと、一点の妥協も許さない
という福西氏の姿勢は、多くの参会



者を感じさせた。将来を担う子ども達に日本、奈良、和紙の素晴らしさを伝えたい、そして学校の先生には日本の伝統産業について、授業でできるだけ多く取り上げてほしい、と熱く述べられた。

【提案発表】

◇「良心を大切に、社会と自分を つなげて考える授業づくり」
提案者 長瀬 拓也
(同志社小学校)

同志社の精神である「良心」、つまり「周りに流されるのではなく自分なりに正しい考え方をもち、変革を自ら実行する人物」をめざすことをめあてとした社会科学授業の提案であった。
夏休み期間を利用して行われる北海道長沼町農業体験を社会科学習と関連させるという内容。事前の調べ学習ではアクティブ・ラーニングの手法を用いたという。農業体験後の児童の心の変容にも触れた。また、「長沼の大豆づくり」を題材にした授業実践についても紹介された。

算数部会

学び合う算数授業を目指して

川崎 庸右 (追手門学院)
今年度、奈良学園小学校で西日本私小連の一日研修会が行われました

た。算数部会には一四三名の多くの先生方に参加していただきました。奈良学園小学校は幼小中高一貫制の学校で、幼稚園から高校生まで教育区分は、三―四―四―四制です。最初の三年間は幼稚園、次の四年間は小学校第一学年から第四学年まで、その次の四年間は小学校第五年から中学校第二学年まで、最後の四年間は中学校第三学年から高等学校第三学年までになっています。今回の研修会の授業で感じたことは勿論ですが、何度か学校に打ち合わせに伺った再、小学生が活動している同じフロアで、中学生や高校生が質問をしに職員室に来る姿、自習室で学習している姿、友人たちと楽しそうに談笑している姿等、画一的な教育でなく、奈良学園の独自の、新しい教育への取り組みを見せていただきました。
午前は授業公開を行いました。二年「三けたの数」(森脇菜月先生)、三年「あまりのあるわり算」



(風間 寛先生)、五年「合同な図形」(松原岳生先生)です。どの授業も子どもたちの意見を大切にしながら、課題に迫るものでした。また、高学年の授業では、ICTを活用し、次の教育へ向けての提案授業をしていただきました。
午後はまず、三分科会に分かれ午前中に行われた授業の協議会です。協議会の内容は「活動の中で根拠を

問うことで気づきを大切にし、考える力を培うことができたか、「ノートを活用して意見交流し、互いの考えを深めたり高めたりすることができたか」、また「自分の言葉で説明したり他者の意見と比較したりすることを通して考える力を培うことができたか」という授業者の主張に対する内容や教材の扱い方等、活発な意見交換がなされました。

研修会の最後は全体会での講演会です。今回は奈良教育大学名誉教授の重松敬一先生にお話をいただきました。「今、算数科に求められる学びの在り方を考える」というテーマで、その中でも特に「私立小学校が担うべき役割とは」という観点で、私たち私立小学校教員にわかりやすく講演をいただきました。二十一世紀型学力、アクティブラーニング、小中一貫教育、次期学習指導用要領改訂等、これから私たちが進む道を教えていただき、また、メタ認知の重要性や、「数学的思考力」を高めるためにはどんな授業、どんな活動が大切か具体例を挙げながらお話いただき、たいへん充実した研修会となりました。

理科部会

おもしろい理科の授業をつくる

古垣内千鶴子（京都女子大学附属）

奈良学園小学校では、

理科の研究主題を『予想』『考察』で高める思考力・表現力」と設定され、課題は何かを認識し、どのように明らかにしていくか、考察の場面でもどのように表現するか、他者と意見を交わしより学びを深めるにはどのようにして相手と自分の考えの違いや共通点を伝え合うかをメタ認知として進めてこられた。

荒木圭代教諭の「じしゃくのふしぎ」（三年生）の授業では、磁石で遊んだ時の気づきを、磁石という言葉からスタートしたウエビング（ク



モの集）図にかかせ、散らばった点の気づきを、友達の意見を聞いたり、実験したりして、関係づけて線にして繋げ、磁石の性質を知ることを目標にされた。書くだけで、自分の知識の広がりや繋がりが見てとれるので、子どもたちは楽しんで取り組んでいるようだ。図の中から出た五つの疑問を順に調べていく。本時では

「磁石がついた釘は一体どんな力を持つのかか調べよう」を学習課題として「磁石についての鉄は磁石になったのか」「極はあるのか」を調べた。強い磁石の前では弱い磁石は極が変わるのではないかという意見が素晴らしかった。最後にウエビング図に気づいたことやわかったことを繋げて共有された。

福呂匠教諭の「電磁石のはたらき」（五年生）の授業では、コイルがうみだす磁界の強さは巻き数を減らしていくとどうなるのかという逆転の発想を検証する授業だった。電流が流れている導線には巻き数が少なくなっても磁石の力があることに気づき、弱くなっていく磁力の原因を明らかにするためにどのような取り組みをすれば良いかを考えさせる。これまで使ってきたクリップだけで判断するのではなく、砂鉄やホッチキスの芯などより小さいものではどうかと考え、実験された。今回はコイルの巻き数二回での実験だったが、児童の〇回ではどうかというつぶやきを拾い、次回実験をされるそうだ。

チャイタンニヤ・バンダーレ先生（I-J-A-A-I代表取締役）に「海洋生物の不思議にせまる」と題して

講演をしていただいた。酸素なしで命は存在するか、毒をえさとして食べても成長率が高いものは存在するかという興味深い二つの問いから始まった。答えはどちらも Y.E.S. 海底火山では地球内部のマグマが石と混ざって噴出するが、石に含まれたミネラルによって、生物の命が保たれる。酸素〇パーセント、光が全く当たらない環境下で、バクテリアが毒（硫化物）を食べることで有機物を合成し、そのバクテリアを他の生物が食べ、食物連鎖が形成される。プランクトンネットを用い、水深二〇〇メートルの深さまでのプランクトンを調査された。ヒラメの養殖では、閉鎖式循環陸上養殖の研究をしておられる。水温を調節し、塩分をキープすることができ、ウイルスや病気など外部からの影響を受けないように、使った水を排水しないので外部の環境への影響が少ない期待の養殖法である。流暢な日本語で語られた。



生活総合部会

本物にふれ学習する

生活総合部会

佐々木理恵子（京都聖母学院）

今年の研究授業は、奈良学園小学校の中村浩子先生に「おおきくなあれ わたしの はな」という題材名であさがおの観察の授業をしていただいた。「ほめほめカード」を使い、お互いのよい部分や意見を交流する中で、新しい発見をさせることがあての授業であった。中村先生は、子ども達には、生活科の授業の中で、「植物を育てられる喜びを感じてほしい。」「他の子の意見を聞いて新しい発見ができる視野の広がりを感じてもらいたい。」と考えており、その手立てを取られていた。実際の授業の中では一年生ということもあり、「ほめほめカード」の中に友だちの中の新しい発見まで書くことができた子は少なく、授業研究会の中で、「ほめほめカード」には新しい発見だけでなく、「すごい」と

書いているだけでも良いのではという意見が聞かれた。また、他者の中の発見を自分のものにできることが一年生に可能なのかも考えながら手立てを取る必要があると話された先生もおられた。このように植物を扱う以上、実際のものを手で触りながらお互いに共有する必要があるとも話され、植物を題材に授業を行う際の実例を頂いた。

午後からは奈良の鹿愛護会の吉岡豊先生に「奈良公園のシカの魅力について」ご講演いただいた。奈良は外国人旅行者が二〇一五万人を超えた。主な観光地のどこにもシカがいる。シカの魅力は、かわいくておとなしいことにあり、奈良の観光にとつて大切な存在である。そのこともあり、奈良の小学校では四年生の社会でシカの学習を行うぐらいである。伝統行事となつているシカの角切りは、江戸時代に興福寺が奈良奉行の立ち会い

のもとで始められた。オスは十頭ほどのメスを連れていて、角が完成するとオス同士がけんかをするため、人間や他の鹿を傷つけることがないようにするためである。現在は観光の一つとし、毎年十月に日時を決めて行われている。そんな奈良のシカも過去に二度、絶滅の危機を迎えた。



音楽部会

せんりつのとくちょうを

感じ取ろう

藤原かおり（甲南）

一度目は、明治四年に鹿を有害獣として射殺を許可したことが原因である。二度目は、昭和二十年に戦争の影響で七十九頭にまで激減し、絶滅寸前の危機に陥った。一九五七年に国の天然記念物に指定され、現在ではおよそ一二〇〇頭が奈良公園一帯に生息している。現在、奈良のシカが死亡する原因は、主に二つある。一つは交通事故であり、もう一つは食中毒である。これらは人間が気をつけなければいけないことだと強調された。奈良公園では、約二メートルの高さまで下枝がなく、見通しが良い。これは「ディアライン」と言われて、シカが立ち上がり、食べられる高さまでの草や葉を食べるためにできるものである。またシカの糞は、コガネムシが分解し、ミミズなどが土にした後、芝生ができ、それをシカが再び食べるというサイクルができていく。このような奈良公園の環境を守るためにも、奈良のシカを大切にしていかなければならないと話された。奈良のシカだけでなく、地域の歴史や環境を学ぶためには本物にふれなければならぬと再確認した有意義な時間であった。

今回の研修会は、奈良学園小学校の吉田知紘先生が「せんりつのとくちょうを感じ取ろう」という題材で四年生の授業をしてくださいました。

導入では、吉田先生の笑顔あふれる優しい雰囲気の中で、既習曲を表豊かに歌い、子どもたちが自然に楽しい音楽の授業に入っていました。本時の教材である「ゆかいに歩けば」の曲が子どもたちは大好きな様で、何度も歌いながら、前半後半の曲の感じについて、お友だちと意見を交流しながら、曲想についての考えを深めていきました。電子黒板を使用し、カラーペンでわかりやすく子どもたちの意見を書き込み、曲の感じと楽譜の特徴的なリズムにも注目させて、楽曲全体の雰囲気をつかませていました。その後、スタッ

カートやのばす音に注目させ、どのように表現の工夫をするのかを考えていました。思考を技能に活かしていくことはとても難しいですが、子どもたちは曲想にふさわしい表現を工夫しながら、想いや意図をもって歌おうとしていました。

どの活動においても、子どもたち

はまっすぐに楽曲に向かい合い、とても楽しそうに表現していました。日頃から吉田先生が、丁寧な合唱指導を行い、歌うことが大好きな子どもを育て、お友だちといっしょに考えながら、表現の工夫をさせるように指導されていることがうかがえました。



午後からは合唱指導者の前田美子先生をお招きして、合唱指導のノウハウを教えてくださいました。始めに音楽部会恒例の「みんなで歌おうのコーナー」では、東日本大震災で被災した福島県の中学生が作った「群青」という曲を合唱しました。ノートルダム学院小学校の寺下先生の素敵な指揮でより一層深く想いのこもった音楽になりました。

その後、この曲がつけられた背景を前田先生がお話してください、この曲の持つ力や歌詞に寄り添いながら歌う指導を教えてくださいました。

その後、教科書の曲を中

心に、子どもたちが夢中になれる指導の工夫や心に届く声かけをたくさん教えていただきました。子どもたちと深く関わりながら、音楽を通して心の教育をしていくことの大切さや子どもたちが緊張の中で楽しみながら歌う指導を学び、実り多い研修になりました。

図工部会

心に残る造形活動

入江 俊平 (京都聖母学院)

奈良学園小学校の寺田先生による六年生「心に浮かぶ夢の世界」の公開授業が図工室にて行われた。

本題材は自分の行ってみたいと思う夢の世界を自由に想像して絵に表す活動である。児童は絵具やパステル、色鉛筆、シャボン液など、材料を自分で考えて選ぶとる。

授業が始まると黒板には子どもたちの作品が掲示されていた。ファンタジックな世界やロボットの世界、スイーツの世界など、夢の世界とい



う名前にふさわしい作品が並んでいた。子どもたちは友達のを見て、気に入った作品や感じたことを発表した。その後の作品製作では児童は自分の思いに合った材料を選んでいく様子だった。絵具やコンテでグラデーションをしたり、シャボン液で模様を作ったり、それぞれが色々な活動をしていた。印象的だったのは

どの児童も迷うことなく活動していたのだが、どの材料を使っている児童も絵がとても明るかった。絵具の水加減や、明るい色から暗い色へと進めていくといったような塗り重ね方など、自由に材料を選び表現している中で、材料の使い方やその基本が身につけているようであった。そのうであるが故に、児童はいきいきと活動していた。

児童が自主的に活動したり、材料の使い方を見につけたりするための教員の工夫がいくつも見られた。授業の終わりに「おなやみの紙」に悩んでいることを書くと、それに対して教員がアドバイスを返してくれるのである。構図や色使いなど何でも、わからないことがあれば次の授業時にはすぐに教員からのアドバイスがもらえるのである。時には必要な資料や写真が添付されていた。児童がスムーズに活動するためのきめこまやかな支援である。

また、各学年の材料や題材のつながりを考え、カリキュラムが作られていた。モダンテクニックを学ぶ場合、一、二年生のときはモダンテクニックで遊ばせる、三、四年生ではモダンテクニックを学ぶ。五、六年では自分で選ぶというようにつながりを持たせているようだ。低学年から体験することで体身につかせて中学年で詳しく学び、高学年で活用している。

事後研究会でも各校のカルキュラム作りについて意見交換をした。提案発表では光華小学校の宮川先生による「図画工作科アウトラインと実際 造形遊びと鑑賞」の発表が行われた。造形遊びの工夫や鑑賞の仕方、また評価の仕方などの発表があった。鑑賞活動の中では、みんなで作った陶器の器を鑑賞する際に「どの器で食べたら美味しい？」という観点を与えて鑑賞すると、子どもたちからは様々な意見が出てきた。色々な観点から考えられた鑑賞活動についての発表がありとても興味深かった。図工の評価の仕方では教員によって図工の評価は意欲、発想、創造的な技能、鑑賞の評価方法は教員によって癖がでる。評価の仕

方や考え方を今一度考えさせられ、見つめなおすことができた。
また、各学校から約六点ずつ展示した作品を鑑賞した。それぞれの題材作りの工夫などを意見交流した。

保健体育部会

保健体育部会研修会報告

綾田 満成（フートルダム学院）

今年度の研修会は奈良学園小学校を会場に行われた。

今年度より、保健部会と体育部会が研修に関しては分離したので、午後は始めから、それぞれの部会に分かれて研修が行われた。体育分科会では、午前に行われた公開授業の事後研修会が行われ、皆木先生の授業をもとに活発な話し合いがもたれた。第二部として、甲南小学校の村壮宏先生が「甲南小学校体育科実践報告 ソフトバレーボール」と題し研究発表をされた。第三部として奈良学園大学准教授の森一弘先生に講師としてお越しいただき、「小学

校におけるフラッグフットボールの実践」と題し、実技研修を行った。パス練習やランニングプレーなどの基本的な技術練習に加え、最終はミニゲームなども行った。

保健部会では、帝塚山大学非常勤講師の小西浩嗣先生より『心と身体のリフレッシュ』というご講演をいただいた。児童・保護者対応などの業務を行う養護教諭自身が元気になるということを主題に、実際に身体を動かして様々な研修を行った。研修に先立ち、ココロ（感情）・カラダ（行動）・アタマ（思考）はつながっているということとをわかっていても、その事を実感するのは難しいという説明を受けた。そして、何かをする時に、どう行動をするかを理解し（思考）その行動ができれば（行動）嬉しい（感情）という経験をを通じて、ココロ・カラダ・アタマのつながりを実感すべく様々な活動を行った。手を使った簡

単なゲームや、自分の名札に自己紹介文をつけながら相手の名札と交換し、次の相手には交換した名札の人になりきって自己紹介をしたり、手を繋ぎ一つのフラフープをみんなで協力してくぐり抜ける等した。実際に活動の手順はわかっているにもかかわらず、実践してみると思い通りにいかず難しさを感じたり、できる



と嬉しいという、まさにココロとカラダとアタマのつながりを感じることでできた。また養護教諭同士が手を繋ぎ終始笑顔で研修を受けることができ、講演が終わった後はとても元気になった研修会となった。

家庭科部会

家庭科の授業で教える住教育

高見 英子（四天王寺学園）

家庭科での住教育には、大きな課題があります。この課題の為に、現場で教える教師たちは困難を感じているのが現状です。

小学校での住教育とは、『整理整頓の工夫』や『掃除の工夫』、『汚れ調べ』『住まい方の工夫』などがあります。これらの学習は、それぞれの家庭において実践を期待されるものですが、学校では知識と簡単な実習のみなので、学んだ知識が家庭でどう生かされているのかを調べることでできません。休みの日に宿題に出すなどをして、家庭でどのように



実践しているかで評価の対象とすることがあります。
 困難を感じている原因として考えられるのが、まず、学習時間が短いことです。原因を考え、改善に向けて学習計画を立て実行するまでに、四時間ほどしかありません。知識が定着するには、時間が足りません。次に、児童の興味関心が低いこと

陽を照らすことで部屋の温度の変化を測りました。窓にすだれをつけて影をつくったり、カーテンをしたりすることで、温度の違いを表にまためていました。その実験結果をもとに、本時では、方角の違う窓にどのようなもので影をつくり、部屋全体に風を通すかをグループで話し合わせていました。

です。食教育に比べると全然違います。教える教師側にとっても教材が少なく、教えにくさを感じています。

そして、他教科との関連性でみれば、社会科、理科、生活科などのあわせた知識がないと、より深めた授業にならないからです。

さて、今年度は、奈良学園小学校の谷川貴美先生に「涼しい住まい方を工夫しよう」の題材で授業をしていただきました。谷川先生自身は、理科も教えていらっしゃるということ、教材は理科に関連した手作りのものでした。空き箱を部屋に見立て、白熱灯の太陽を照らすことで部屋の温度の変化を測りました。窓にすだれをつけて影をつくったり、カーテンをしたりすることで、温度の違いを表にまためていました。その実験結果をもとに、本時では、方角の違う窓にどのようなもので影をつくり、部屋全体に風を通すかをグループで話し合わせていました。

涼しい住まい方としては、近年ではエアコンのスイッチ一つで解決してしまいがちですが、昔ながらのすだれにも着目し、影をつくりながら風も通す利点にも触れました。また、短時間で部屋の温度を下げるために、部屋全体に風を通すための窓の開け方を考えました。窓にスズランテープを貼ることで、風の流れを視覚的にとらえることができました。

その後の講演・実習では、蛇の目ミシンさんに来ていただき、どのような場合に故障がおきるのかといった視点でお話していただきました。正しい使い方は理解しているつもりでしたが、故障の多い使い方の原因がわかると、押さえるポイントがわかってきてとても参考になりました。その後、ミシンを使った簡単なランチョンマットを実際に作って、作り方のポイントを再確認しました。



外国語部会

私学の外国語教育を考える

林 美江(暁)

社会の急速なグローバル化の中で、英語力の一層の充実が重要視されている。文科省は、二〇二〇年には五年生から正式な教科にすると発表された。しかし、私立小学校では、早くから外国語を教科とし、公立に先んじて、様々な取り組みを行ってきた。「私学の外国語教育を考える」をテーマとし、各校の実践を共有しながら、共に向上できる教師集団として取り組んでいる。

今年度は、奈良学園で授業研究が行われた。教師二年目の先生と業務委託しているネイティブの先生とのTTの授業だった。

[How are you?]

[How's the weather today?]

[What's the day of the week?]

[What month is it?]

を尋ね、クラスルールを英語で唱えていた。今から英語の学習をするという切り

替えができていたようだった。次に、“Sight Words”（視覚と言葉を見ただけで理解できる単語）の発音練習では、then, two, four, jar, car, them, far と電子黒板を使用し、児童が声を揃えて発音していた。単語毎にレベルを分け、唱えられたらレベルをアップしていくので、意欲的に取り組む児童の姿が見られた。また、テキストを用いた Phonics の学習では、bag, wag, tag, rag [ag] man, can, van, fan, [an] bat, rat, mat, fat [at] の綴りと発音の関係を理解させ、正しい発音の仕方が身に付くよう指導されていた。低学年の授業では、動きを入れたり、視覚で引き付けたりと飽きさせない手立てが必要になる。授業後には、様々な意見や感想が寄せられた。様々な意見を聞きながら、互いに学び合える授業研究ができた。

午後からは、関西大学外国語学部大学院 外国語教育学 研究科教授の田尻悟郎先生に、「コミュニケーション能力の育成」について講演して頂いた。先生は、公立中学校に二十六年間勤務されたご経験がある。小学校からの英語のデメリット

として発音の問題があるので、ネイティブがいらないなら、ICT教材を上手に活用する事が大事であると話された。五年生くらいから英語の文を読み始めるので、正しい発音で読めるために独自の発音記号（田尻式カナ発音記号）を考えられた。家庭学習で、CD等音声教材がない時の補助として作られ、発音記号をマス

ターするとネイティブに近い発音ができること紹介された。他にもエアアを早口で言う時、aに近い発音でできる事や、「あつ、わかった」はuの音、「あ？わかった」はaの音等、日本語の中にも英語と同じような発音がある事、教師は、他の人の指導を真似ても同じようにはできない、どのような指導が自分にはできない、



分のやり方を研究する必要がある事、生徒が知りたい情報の内容を英語で聞かせる事によって、集中して聞き取る力が向上すると話された。

教える工夫を日々研鑽され、生徒から多くの事を学んだと言われる豊富なご経験や知識を元に、常に英語を学ぶ面白さを生徒に与え続けておられる先生の教師としての姿勢に、感銘を受けた。そして、先生の聴衆を惹きつける話し方にも、学ぶべき技、教師としての魅力を感じた研修会であった。

学級経営部会

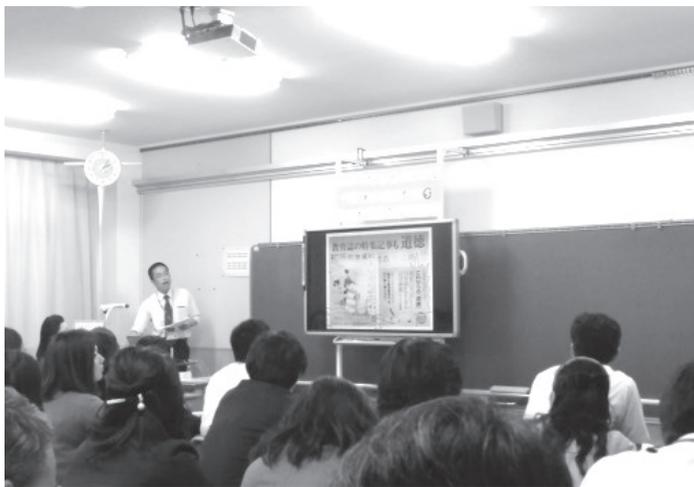
道徳の教科化に向けて

浅川 功治 (甲南)

学級経営部会では、平成三十年から施行される「特別の教科 道徳」のスタートに向けて、道徳授業について考える研修会を企画しました。道徳教育に対する関心は高いようで、五十名ほどの多くの方に参加していただきました。

現在の道徳教育は「全体主義」と「特設主義」の二本立てで行われています。つまり、学校の教育活動全体で行うとともに、特設された「道徳の時間」に取り立て指導をするという事です。今回の一部改正はこの「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」に変わるということになりました。

前半は、雲雀丘学園小学校の打村孝志先生に「雲雀丘学園小学校における道徳の教科化に向けての取り組み」について、提案発表していただきました。具体的な実践をもとに道



徳の授業の作り方について、発表していただきました。
雲雀丘学園小学校では、ワークシートと道徳ノートを用い、既にポートフォリオによる評価を実施しています。「特別の教科 道徳」が始まり、通知表や指導要録に評価を記述する際に、ポートフォリオ等を用い、根拠のある評価をしていくことの必要性について言及されました。

また、道徳の時間と学級指導の関連について、学級指導が「外科的手術」なものに対し、道徳教育には即効性はないがじんわり効いてくる「漢方薬」のようなものであると例えられました。道徳教育の考え方は日々の学級指導にもつなげることができるといいます。例えば、一輪車の練習をして

いる子がいるとします。その子への学級担任の声掛けとして、「一輪車できるようになった？」とすることがあるでしょう。しかし、その声掛けを「練習続けたる？」と変えることで、「できたこと」（結果）に着目するのではなく、「継続すること」（過程）に着目するという教師の姿勢を、子どもたちに伝えることとなります。質疑応答も、読み物教材の扱い方、話し合いの進め方、教科書の使い方、評価の仕方等、盛んに行われ、



道徳教育への関心の強さが窺えました。
後半は、大阪教育大学教育学部教授の倉本香先生に『考える道徳授業』を作るために「という演題で講演いただきました。道徳の教科化に至った背景や、現行学習指導要領と次期学習指導要領の違い、学習指導要領改正のポイントについて詳しく教えていただきました。物事を多面的・多角的に考えることの重要性

も説かれました。

ワークシoppでは、教師自身が多面的・多角的に考える必要があるという考えのもと、「クラスの合唱コンクールに臨む生徒の様子」の資料を用いて、道徳の内容項目「よりよい学校生活、集団生活の充実」から、「協力する」ことについて、多面的・多角的に考える練習をグループで行い、学びを発表し合いました。教科化に向けて、道徳教育について考える好機となりました。

メディア教育部会

ICTの本格導入に

どう対応するべきか

森岡 俊勝（雲雀丘学園）

○講演『子どもの未来をつなぐ教育

ICTの可能性』

長谷川 真理氏（富士通）

ドコモでは教育事業のプロジェクトに力を入れている。古河市は、生徒一人一台を目ざしLTEタブレット一四〇〇台を導入。大阪市の六校

でも導入。私学では、昨秋から動き四月に導入される学校が多かった。社会に求められる力は、次の時代を作る主体性。人を巻き込み、目標を達成する力。理論的に試行し決断する力。コミュニケーション能力の上に、今の事業の価値を我慢強く継続し、新たな価値を生み出す力。学力との間にギャップがある。今後、思考力・判断力・表現力が必要。基礎学力と二十一世紀型学力の育成。限られた学校現場でやらなければいけない。タブレットで授業を効率的に。生み出された時間は学校でしかできないことに。セルラーモデルは、いつでも、どこでも繋がる。安心・安全。構築・運用・稼働コストを抑えられる。校内・校外。家庭で自由に接続でき、学びが繋がる。反転・アクティブ、アダプティブに繋がる。WIFIモデルの問題は構築・更改に費用・時間・人の負担が大きい。問題発生時、誰が原因を特定するのか。授業が止まるかもしれない



と思うと使わなくなってしまう。LTEにより問題から解放される。ただし、通信料が発生する。iPad・safariによる調べ学習、LTEモデルが五分短かった。ロイロ・AirDropによるプレゼン交換では四分の一に短縮。十々十五分の時間短縮による授業の効率化が図

られる。導入に向けタブレットを入手したいでなく、タブレットを使って何がしたいか先生方と話し合っている。機材やルールが自然に決まってくる。通信や端末についてドコモに任せていただけるようなものを作りたいと思っている。

○授業研究『合同な図形』

松原岳生・藤野悟史(奈良学園)

(藤野) 大講義室で授業。AP・書画カメラ・電子黒板・ICT環境がない。AppleTV・RGB端子とHDMI変換ケーブルを使用。iPadをドコモのLTEタブレットでテザリング。書画カメラも。振り返りはロイロのスライドショーで。(松原) どのような活動をしてきたか、振り返れる。すぐ思い出せる。算数科としては書かせ、条件を考えさせたい。技能が伴わなければ思考できない。でなく、ICTで子供達の思考力を豊かに。

○提案『タブレットを利用したe

ラーニングの展開と展望』

竹内豊一(四天王寺)

森岡俊勝(雲雀丘)

(竹内) eラーニングは、作ったも

のを応用できる。時間と場所を選ばない。学び合う場の広がり。クラス間や他校と一緒に勉強できる。双方のやり取りが容易。話し合いの過程の共有も可能。採点を効率化できる。児童を毎回評価してあげることが大切。どう使うか、子どもに対する気持ちがいเดียを生む。

(森岡) ICT整備をどう進めるか。全教員に提案・報告。どう使うか考え計画化。整備中に不具合。本学の取り組みがスペックを越える。解決に、竹内先生が整備されたmodelを。クラウド上にドリル。教材も置ける。反転学習や授業のアーカイブ化も可能では。公立も整備が進む。二の足を踏めば遅れていく。整備はチームで。



学校図書館部会

図書館を利用した

効果的な教科学習の実践

川西 啓史 (光華)

今年度は「図書館を利用した効果的な教科学習の実践」というテーマで研修を行いました。全国さまざまな図書館教育の実践に関わってこれ、現在も研修会等の場でご指導にあたっておられる田上恭史先生をお招きして、ご講演そして各校の実践交流を通じて研修を深めました。

先生のお話を伺っております、図書館は単に子どもたちが集まって読書をする場所、本の貸し借りをする場所というのではなく、教科教育の拠点、さらには学校教育全般に関わる拠点とでもいべき所であるという認識に至りました。

まず、図書館には常に旬の情報を入れておくべきということでした。これは本に関するのみならず、教師が知っておくべき文部科学省からの情報なども含める。そして子ど

もも教師も図書館を利用し、そこで情報を得ることができると環境にしておくことが大切なのだそうです。

次にさまざまな調査結果をもとに読書に関する情報や文化情報をお示しいただきました。子どもたちの時間の使い方(読書、スマホやタブレット、お手伝いなど生活面全般...)を



見ていきますと年齢が上がる程スマホやタブレットに費やされる時間が多くなっている。それに関わらず、そこから得た情報が正しいかどうかを確かめていないということでした。情報が正しいかどうか、出典は何かといったことを明らかにすることの大切さ、そしてそれらの調べ方をきちんと教えているのかということが思い知らされました。

現代、メディアに接する時間が大変長い(高校生以上で一日六時間)にも関わらずそのメディアの中に「書籍」がないという現状。さらにメディアの信頼度について言えば、大いに利用しているはずのインターネットは低く、ほとんど(少なくとも調べるといふことに関しては)利用されていない(新聞は高いというアンバランスな現状。正しく物事を調べるといふことが難しい現代社会の環境に驚かされました。

図書館メディアの活用

ということについては、学習に必要なメディア、しかも先入観を覆したようなものを準備する。生き物や児童の成果物、チラシ、DVD等々。私が今まで考えもしなかった物までもがメディアだということに気付かされました。ただ、図書館には教科書と対応した本があるとは限らない。どんな資料をどのように与えてやるかを常に考えておかないとせっかくの調べ学習が目的から外れたものになってしまう。そういったことの具体例を示しながら我々教師が陥ってしまいがちなあたりをご教授くださいました。

どの教科にも通じる「自分は何を知っているのか。何ができるのか。」「知っていることとできることをどのように使うのか。」といったことが学習できる場を目指すために学校すべての教職員が図書館の良さを知っている状態にすべきであるという言葉が心に残りました。

その後、各校が自校の取り組みや課題を交流し、明日からの実践に少しでも結び付けることができたかと思っております。楽しみながら意義ある研修会となりました。

学校紹介

自ら生きて・生きる

奈良学園小学校

校長 古川 謙二

【学校紹介】

京阪奈学研都市の南に位置する奈良市登美ヶ丘の地に、幼稚園児から高校生までが同じ敷地に学び合い、日常的に交流できる教育環境を目指して、二〇〇八年に幼・小・中が、翌年には高校が開校しました。二〇一四年には小学校六年生が揃い、翌年には内部進学生が中学校に進学しました。

建学の精神「自ら生きて・生きる」を礎に、「和の精神」を大切にし、「たくましく生きる力」を育み、「科学的に物事を見る力」を身につけることを教育目標としています。

敷地内には、野球場・サッカー



場・タータントラック・テニスコートを有する総合グラウンドがあり、フィールド部分には天然芝が敷かれています。また、キャンパス内には同法人の奈良学園大学があります。

【特色】

①十二年一貫教育システム
 小中高は、従来の六・三・三制ではなく、発達段階に応じた四一四一四制の教育システムを導入し、Primary（小一～小四）、Middle（小五～中二）、Youth（中三～高三）という区切りで、早い段階でのリーダーシップの養成やそれぞれの課程をスムーズに結べるように工夫して

います。

②異年齢交流活動

日常における幼小中高活動のほか、幼小中高合同運動会や尚志祭と呼ぶ合同学習発表会を実施し、現在の家庭や地域では少なくなつた異年齢の子どもたちによる交流活動に力を入れていきます。これにより、年少の者の、年長者への憧れや尊敬、年長者の、年少者への思いやりが育つています。

③国際交流活動

小一～小四では週二時間、小五・六では週三時間の、ネイティブ教員と日本人教員による英語の授業を実施し、主としてコミュニケーション能力を高める指導を行っています。また、小五・六では国際交流のための時間も設け、六年生全員が参加するハワイ宿泊学習の事前事後の学習に取り組んでいます。

④宿泊学習

小一～小六まで毎年宿泊学習を実施しています。奈良・吉野・琵琶湖・美山・広島・ハワイと、集団での生活経験から自然と触れ合う生活経験



の拡大、さらには社会や世界を見る目を養うための経験など、実体験することによって将来のための教養をしっかりと身につけることを目的としています。

⑤ICT教育

すべての教室に電子黒板を設置し、子どもたちにとって理解しやすく、より内容を深めた授業を行っています。また、PC教室での情報の授業や高学年でのタブレット端末を使った授業にも取り組んでいます。

平成 28 年度 第 53 回

東京地区教員研修会

期日 平成 28 年 6 月 3 日 (金)

会場 目黒星美学園小学校

東京地区教員研修会を終えて

東京私立初等学校協会

副会長 重 永 睦 夫

六月三日、梅雨入りが近いとは思えない晴れた空の下、目黒区碑文谷の目黒星美学園小学校において、第五十三回東京地区教員研修会が開かれました。サレジオ教会（カトリック碑文谷教会）が学校を守るようにやさしくたずむり閑静な住宅街にある同校は創立六十年を超えます。校舎は築十七年を数えるのに新しさを失わないでいます。同校児童の落ち着いた生活を象徴してあります。緑の外観から校内に入ると木造を基調とした造りが広い廊下と合わせて児童の視点を大事に設計されたことを伝えていました。三階に設けられた十二畳の和室では、六年生が卒業を前に茶道のお点前を体験すると聞きました。福音書に示

の दौरानとうなずかされました。

こういうように充実した施設をフル活用させていただいて十五部会におよぶ研修を展開したわけですが、

された神の愛に加えて和の世界に礼法をまなぶ営みも昨今の目黒星美学園小学校の幅広い人気を支えている



同校の石川俊夫教頭先生をはじめとする教職員の皆様、そして父母の会の皆様が一年前から準備してくださり、この日も早朝から警備員さんを加えた総勢でもてなしてくださいました。そのお力によって本年度の研修会を開くことができました。心より感謝申し上げます。なお、一部の研修は近くにあるトキワ松学園小学校を会場としたことを明記して合わせて感謝申し上げます。

参加者千五百名におよぶ研修会は体育館における開会式で幕を明けました。司会は例年好評の東初協 和智紀朗理事が本年も務めました。会長挨拶はこれまでの矢崎昭盛前会長に替わって五月に就任したばかりの小泉清裕会長でした。小泉会長は人見楠郎先生以来、昭和女子大学附属昭和小学校から二人目の東初協会長です。かつての私立小学校の雄たる人見先生の薫陶を直接うけている貴重な方だけに、これから東初協をリードしていく力強い抱負を述べて拍手を浴びました。

続けて来賓の東京都生活文化局私学部長の加藤仁様からご挨拶を頂戴しました。加藤様は東京都議会が始まったばかりのご多忙を押しご出席くださいました。私学振興にご尽

力くださることを表明していただいたほか、来る東京オリンピックパラリンピックに向けて本協会の協力についても言及されました。皆様ご存じのとおり今会期の都議会は世間の耳目を集めいつにもまして緊張していたのですが、加藤部長様には本研修会のために時間を割いて下さいました。まことにありがとうございます。

三人目のご挨拶は、会場校を代表して目黒星美学園小学校の小島理恵校長先生。シスターでもある小島校長先生は、聖ヨハネ・ポスコ神父と聖マリア・マザレロ シスターを二人の創立者として仰いでおられることに触れつつ同校で研修会が開かれることに歓迎の辞を述べられ万雷の拍手を浴びました。

開会式の結びは恒例の永年勤続者表彰。二十三校二十七名の先生方に小泉会長より表彰状と記念品が渡されました。その後、一斉に部会研修に分かれ充実した一日を過ごしました。各部会報告をお読み願います。

末尾となりましたが、本研修会運営に携わられた研究部主任、運営委員の先生方の労をねぎらい申し上げて、以上ご報告と致します。

国語部会

魅力ある国語教師を目指して

梅田 芳樹 (学習院)

午前 公開授業と協議会

二年生、三年生、六年生で、物語教材での公開授業がありました。

目黒星美学園小学校の国語科では、「考えたことを論理的に表現できる力を育む国語教育」を目指して、日々授業づくりに取り組んでいらっしゃいます。公開授業では、子どもたちが、主体的に表現しながら学び合う姿を見ることができました。

・二年生 新出 美紀先生

「お話を読んで、かんそうを書こう」
『スイミー』(光村)の授業

第五場面を読み、教師が用意した二枚の絵を比べて、どちらが物語にふさわしいかを話し合いました。子どもたちは、この活動によってスイミーの行動を正確に読み取ります。さらに、「ぼくが目になろう」と言ったスイミーの思いを、場面やスイミーの行動と結びつけて、それぞれの考えを発表しました。

・三年生 増田 健先生

「読んで感じたことを発表しよう」
『もうすぐ雨に』(光村)の授業

物語全体を読み、中心人物と登場人物の動物たちとの心の距離に着目しながら、登場人物の心情の変化を読み取る授業でした。子どもたちは、登場人物の心情を、教科書の言葉から想像して、自分の言葉に置き換えて発表しました。

・六年生 宮下 武修先生

「人物と人物との関係を考えよう」
『風切るつばき』(光村)の授業

「クライマックス場面(山場)の中のクライマックスはどこか」という学習課題で授業が行われました。それぞれの考えを発表し、聞き合うことによって、各自の物語の読みを深めることができました。

午後 講演会

講師 二瓶 弘行 氏
(筑波大学附属小学校教諭)

「自ら学ぶ、ともに学ぶ」

二瓶先生は、目黒星美学園小学校の校内研修会の指導をしていらっしゃいます。この日の公開授業もご覧になり、どの授業もとても積極的な学び合いの場が作られていたとおっしゃっていました。

講演会では、金子みすゞの「ふし



「ぎ」などの詩の模擬授業の形式で行われました。子どもたちが「自ら学ぶ、ともに学ぶ」授業づくりの要点を、授業の場面ごとに、そこで教師が何を願う、子どもにどんな力をどのように働きかけながらつけるのかを、子ども役の私たちに、実践的に示してくださいました。

- ・ 作業を指示したときは、ここまでさせようと考えたところまで全員がやっているかを見切つてから、作業を止めさせる。
- ・ 発言を促すときは、全員に発言し

てほしいことをはっきりと伝える。発言する人、聞く人という役割をつけさせてはいけない。

- ・ 音読に躊躇しない集団をつくる。どんな小さい声でも褒める。
- ・ 文章は、筆者が伝えようとして懸命に工夫して書いたもの。その思いが表れている工夫を、必死で受け止めようとする子どもを育てる。

二瓶先生の模擬授業を受けながら、改めて教師の教育にかける強い情熱が大切だと痛感しました。

社会科部会

社会科研究部の報告

大野 俊一（慶應義塾）

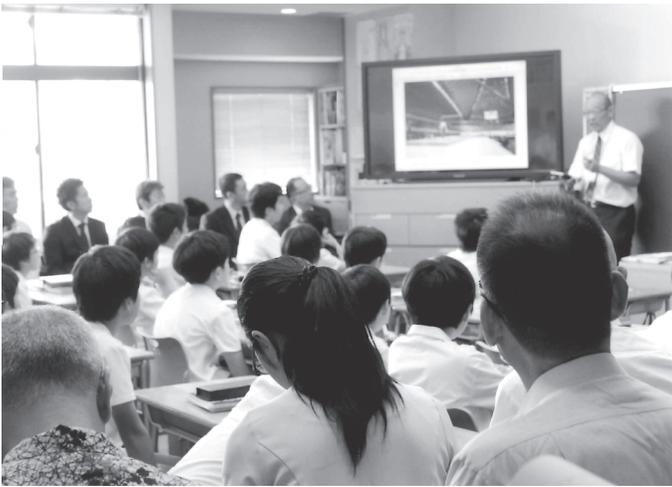
午前は、二つの授業公開とその授業をめぐつての話し合いがそれぞれ行われました。

目黒星美学園小学校では、自分の

疑問に対して予想を立て、資料の読み取りなどを通じて論理的に検証できる力を育むことを目標としています。違った考え方を共有することで新たな見方を知り、考えをより深めていく活動を通じて、社会的現象やその背景などに気づき、各々がお互いの意見の良さを認め合えるような学び合いの出来る授業をめざしていきます。

一つは、四年生担任の加藤萌先生（目黒星美小）が住みよいくらしの中から「ごみのしまつと再利用」の授業を行いました。本単元では身近な生活問題について触れていて、本時は、教科書の図を見て、わかったことや疑問に思ったことをあげるという授業でした。ここで出た疑問は、後日行う社会科見学のなかで解決していく予定で、見学後は、「ごみ減量計画」を立て実行していくという単元計画です。目黒区以外から通っている子どもも多いので、地域差について考える場面をいくつか設けていました。

もう一つは、高木信明先



生（目黒星美小）による六年生の「戦争と人々のくらし」の授業を行いました。四月下旬に三泊四日の沖繩合宿で、沖繩平和祈念資料館の見学などをしており、そこで学んできたことを、四人グループを作り、四つのテーマで壁新聞にまとめるという活動を本実践の前に行っていました。前時までの振り返りで授業が始まり、合宿後にまとめた壁新聞の発表をもとに、「戦争をなくし、平和を創り出すために、今ぼくたちは何を

すべきか」をクラス全体で考えていきました。「友達と仲良くすること
で戦争はなくなるのか。」という意見
が出ましたが、時間が限られていた
こともあり、そこを深めていくこと
とは出来ませんでした。しかし、こ
うした意見が出てきたことは、身近
な事例と戦争をつなげて考えていく
視点を持つことができたからでしょ
う。子どもたちの話し合いから、平
和に対する認識の深まりを感じ、ま
た、現地での調査・体験の重要性を
改めて感じることができた授業実践
でした。

午後は、國學院大學人間開発学部
教授の安野功先生の講演でした。社
会科の英訳が「social studies」
であり、決して「Learn」ではない
ことから、研究探求を目的とした教
科であるということを皮切りに、社
会科の授業力について多くの示唆に
富んだ話を聞くことができました。

社会科らしく考えるということと
は、社会事象に対して疑問点を持ち、
それに対する自らの意見を周囲とと
もに練り上げていくということ、
いわば「自分発、みんな経由、自分
行き」の思考であるとのことでした。
講演では、先生からの話だけでなく、
地図帳や地球儀を用いた技能の

指導についてや、社会科固有の言
語活動について、模擬授業形式で聴
講者も一体となった活動を行いました。
実体験を持って深い学びを得る
ことができました。

算数部会

子どもが主体的に

考えたくなる算数授業

奥山 貴規 (立教)

午前の教科別研究会Ⅰでは、一年
「たしざん(一)」（山崎文子先生）、
四年「1けたでわるわり算」（木島
麻美先生）、五年「小数のかけ算」（細
谷勇太先生）の公開授業と授業を振
り返っての協議会が行われました。
協議会では、少人数グループでの話
し合いを行い、多数の意見が出され
る活発な会となりました。

高学年の協議会では、自力解決の
時間が適切であったか。児童の計算
力の差をどのように考慮するべきか。
数字を一回ずつしか使えないルール
は必要であったのか。等の意見が出
され、それをもとに話し合いがなさ

れました。授業・協議会を通して、
目黒星美学園小学校の研究主題であ
る「ともに学び合う子」主体的に学
習課題を追究する姿を目指して」の
様子を伺うことができました。

午後の教科別研究会Ⅱでは、例年、
午後は講演会のみとなっております
が、今年度は新たな試みにチャレン
ジしました。元成蹊小学校の桂雄二
郎先生の講演会「子どもが主体的に
考えたくなる算数授業を目指して」
と、立教小学校の佐藤稔先生による

講座「算数教材のつくりかた」、さ
らには、先生方の日々の算数の悩み
を相談できる「算数グループトーク」
の三本立てで行いました。

算数グループトークでは、担任・
指導している学年ごとに四〜五名の
グループを作り、運営委員が司会と
なり算数の授業に関してや教材研究
について、子どもの指導に関してな
ど様々な話題で盛り上がりました。
元成蹊小学校の桂雄二郎先生の講
演会では、算数・教材・子ども・授
業を通して、教師としての在り
方をお伝えいただきました。教
師こそが主体的に学び、人間力
一人としての魅力—を磨かねば
ならないことを、桂先生のお話
ぶり、お人柄か
ら学ぶことが
できました。



立教小学校の
佐藤稔先生によ
る講座では、実
際に下のような
教材をつくりな
がら、教材をつ
くるときポイン
トをお教えい
ただきました。
そして、明日の



授業で使える CALMERO (カルメイロ) や正方形パズルや計算ジグソーパズルなどたくさん教材を紹介して頂きました。

スタート ↓ 10めいろ 10をつくりながらすすんでいきます ↓

1	9	8	6	8	1	10	0
3	1	3	2	8	9	4	3
2	9	6	7	1	3	0	7
8	3	8	3	0	2	3	8
4	6	3	5	5	9	8	2
2	1	1	1	1	0	2	4
5	9	2	8	9	8	5	5
1	8	6	1	2	1	3	10

今年度の日私小連東京地区教員研修会で算数研究部に参加された先生方は一六一名でした。また、研修会終了後の算数研究部の懇親会には四十二名が参加くださり大盛会となりました。

理科部会

おもしろい理科の授業を創る

瀧場 進 (国本)

午前は二つの公開授業を参観し、それぞれ協議会を行った。

一つは目黒星美学園小学校の小林成美先生の三年生「植物を育てよう」の授業について。

目黒星美ではホウセンカの栽培に一般的な培養土ではなく、あえて赤玉土と腐葉土と黒土を組み合わせて使用する事で、子どもたちに「土」に目を向けさせ、調べていく課題を設定している。これは校外学習での火山灰の観察や「磁石」「地層」「環境」といった内容ともリンクしている。子どもたちはまず、赤玉土と黒土の見た目や手触り等の違いを調べた後、ペットボトルを活用した透水性の実験を行った。

授業後、参観者はグループに分かれて話し合った後、全体会を行った。栽培に使用した土の処理や再利用、堆肥のつくり方について意見が出された。

目黒星美が研究テーマとする「ともに学び合う子」については、今回の課題はワークシートを使って、観点を絞った方が、子ども同士が気づいたことや意見を共有しやすいのではといった意見が出された。

もう一つは、宮崎名津希先生の六年生「大地のつくりと変化」の授業について。

目黒区の地形図を使って、学校の

近くの土地がどのようにできたかを考えさせ、班ごとにタブレットを使って発表させた。

協議会は三年生と同様にグループで話し合った後、タブレットの活用について授業者が意見を求める形で全体会が始まった。

すでに導入している学校からは、子どもが操作に慣れる必要があるので、理科の授業に活用する前の段階から使い込ませているという報告があった。

また、班で話し合って意見をまとめる活動については、

- ・ 考えによって色分けして意見を共有している。発表者も事前に決めさせるとスムーズ。
- ・ 高学年はなかなか発言しない。子どもの中心にいて、つばやきを拾ってあげる。
- ・ 班でまとめると埋もれてしまう子が出てしまうこともある。まずは個人で考えさせることが大切。

午後には目黒駅近くの国立科学博物館附属自然教育園

実践例や意見が出された。

に移動してフィールドワーク。三グループに分かれてガイドの方の説明を聞きながら、園内を観察して回った。

エゾアジサイ、ムラサキシキブやアサザなどの植物を観察しつつ、ガイドの方からは、DNA研究の進歩で植物分類の改訂が進んでいることや、一九五〇年以來行っている毎木調査で分かった針葉樹や落葉樹林が常緑樹林に変化する大きな遷移と台



風で木が倒れて生じた「ギャップ」にカラスザンショウなどのパイオニア植物が定着していく小さな遷移のメカニズムなど、専門的な話も聞くことができた。

講師の都合で予定していた後半の講演は中止になったものの、充実した研修会となった。

図工部会

つくる喜び、ひろがる世界

相原 史隆（昭和女子大附昭和）

今回の研修会は、目黒星美学園でおこなわれました。大井先生の公開授業で、三年生の学習「魔法使いの見習い」という単元でした。絵の具の使い方の学習の一環で、筆を使わず絵の具の表現をさせるというものでしたが、担任の先生と大井先生の寸劇から始まるとてもユニークな内容でした。児童の絵の具セットから魔法使いが筆を奪ってしまう設定で、魔法使いからの手紙が届けられた後、「筆を奪った。筆が無かったら何も描けないだろう。」と大井先

生が魔法使いに扮した、テレビの映像が流れました。驚いたふりをして大井先生が「どうしよう、筆が無かったら描けないよね。」と言うと、児童は、「そんなこと無いよ。」

「教室にあるもので、描けるよ。」と声をあげました。大井先生の「では、描いてごらん。」という声がけに児童たちは、スポンジ、綿棒、ビーズ、木の枝、ガムテープなど色々な道具が入っている引き出しを自ら探し、



あつという間に作業に入りました。具象的なものから、抽象的なもので様々な絵の具の表現が画用紙いっぱいになりました。色々な道具を張り付けた筆を作り、表現している児童もいて、児童が楽しんで表現活動ができる、日ごろの図工に対する姿勢がよく見えました。

授業についての話し合いは、グループディスカッション形式で行い、様々な意見が出されました。「造形遊びとしての面白さや、子どもたちの学び合いができていた。」などの意見が出て大きな拍手の中、午前の部は、終了しました。

午後の講演は、株式会社 ON-A-R-T 代表取締役 金丸賀也氏による「ON-A-R-T のものづくりの考え方」という講演とエアープランによる実践を体験させていただきました。また、ON-A-R-T の売りであるバルーンを使った恐竜も持ってきていただきました。講演では、金丸氏がどのようにつくりを携わってきたのかを時系列を追って話していただきました。幼

少期に森に入って遊んでいたことがモノづくりの原点であること、仕事を辞めパフォーミングスバンドマンとしてヨーロッパで活躍したこと、テレビのアート番組に出演したことなどの様々な経験を活かし、会社としての創作活動をしてきたということでした。また、創作物をつくるにも科学的知識が非常に大切で、塗料一つをとっても伸縮率が飛びぬけてよいものを輸入して使うなど、道具に関してもこだわりも感じることができました。そのようなこだわりが二〇〇七年に発表したりアルな「歩く恐竜」シリーズに反映され、カーボンなど最新の素材や技術を使う事で、八メートルある恐竜の総重量が二十キロくらいに収まり、かつ俊敏な動きができるという事でした。質疑応答が行われた、最後に金丸氏としては、「子どもたちは、多くの情報などにさらされているので、じっくり打ち込むようにしてほしい。」という願いを話されました。

金丸氏が今抱えている世界を股にかけて壮大な夢を語られている目は、本当に輝いていて、「モノづくり日本」を感じられました。公開授業、講演と実技で実りの多い研修となりました。

体育部会

基礎体力を養う体育

桐谷乃宇奈（成城学園）

主任として六年目を迎え、今年度も「基礎体力を養う体育」をテーマに研究を行うことにしました。

電子機器がはびこる中、小学生の間でもスマートフォンやパソコンの所有が珍しくない昨今、それらによって睡眠時間や運動時間がどれだけ奪われているのか、視力低下や肩こり等、身体にどのような影響を与えるのか心配されます。そんな時代を生きる子ども達に対して、どのような授業を展開すべきなのか、どんなものが考えられるのかを探求・研究したいと思います。「子どもらしい子ども」の育成に力を注ぎます。

午前の研修では、鶴見大輔先生（体育専科）による「マット運動く補助倒立く」の公開授業を参観しました。校舎を建て替えられて十五年とはいえ、大変きれいな体育館でした。準備体操の前に披露してくださった二列横隊・

四列横隊・八列横隊は、集団行動の基本動作として整列の際には有効であり、男子クラスならではの授業の始まり方でした。また、準備体操の「星美体操」は、長年の伝統を感じの特長ある体操でした。

様々な体づくり運動の後、主運動である補助倒立に入りました。三人一組となり、倒立する子に対して正面で支える子と横から支える子の二人が補助となります。正面で支える子は、前做えの様に腕を伸ばし、



し、倒立するこの足首を持ちます。その支えの補助手まで足が届くように横に立つ子が補助をするので、友達に助けられながら動作を完成している様子、また、友達の完成を手本にして自分の技術も整えている様子が見え、互いに学び合っていました。授業を巡つての中で説明いただいた体育科のモットー「目指す児童像と体育科く思いやりの心、たゆまぬ努力、清い心く」が描かれた授業でした。

午後は、日本体育大学スポーツ医学研究室名誉教授であられる山本郁榮氏による講演「子育て」を拝聴しました。山本氏はレスリングにおいてミュンヘン・オリンピック日本代表として活躍された実績の持ち主ですが、中学・高校生時代はバスケットボールや剣道を学び、日本体育大学に入学してからレスリングと出会い、四年後には日本一に輝かれました。選手引退後は、渡米し、東シシガン大学でテーピング理論を学び、日本にテーピング技術を持ち込んだ第一人者です。三人のお子さんをレスリング選手の日本代表レベル

に育て上げた上に、日体大レスリング部の指導者として多くの日本代表選手を育成されました。優秀な選手を育てる方法を十項目以上うかがった中で、右利きならば左利きの技を、左利きならば右利きの技を練習し、あらゆる技術・技能を身につける事が大切であること、褒めるも怒るもタイミングを考えることが大切であるというお話に感銘を受けました。短い時間ではありましたが、大変貴重なお話でした。

メディア教育部会

タブレットの導入と活用を考える

田中栄太郎（豊明）

メディア教育研究部は今年度もテーマを昨年度から引き続き「授業の中でのメディアの活用を考える」として活動します。この十数年間の内にパソコンや携帯電話等の情報端末の進歩はめざましく、それにまつわる人々の生活も大きく変わってきました。また、それに伴い教育の場

にもこれらの端末を取り入れた授業が求められる様になりました。文部科学省が掲げた「二〇二〇年までに一人一台のタブレットを導入」という目標に加え、次期学習指導要領に向けた「小学校でのプログラミング教育の必修化」も有識者による検討が進められています。

メディア教育部会では、これらを課題と捉え、今年度は私立小学校各校がどの様に対応していくのかを検討するための一助になるような企画をしていこうと考えております。

今回の地区大会の午前の公開授業では、部会向けの授業は特定されておりませんが、目黒星美学園小学校ではiPadの導入が進められており、タブレットの活用がいくつかの授業でなされました。ご覧になった先生方からはタブレットを使用する良さや課題を知る事ができたとの声が多くありました。

午後の部会は「みんなで使えるようになったiPad」と題し、メーカーの方による講演を開催しました。

iPadはタブレット端末として多くの学校で使われていますが、一人一台の環境を実現している学校はまだ少数で、複数名で一台という使い方が多い現状です。三月にアッ

プルから発表されたShared iPadという新機能は、複数のログインに対応し、児童一人一人がパーソナルに端末を使用できます。また新アプリ「クラスルーム」はOS上で児童の端末の管理、把握が可能となり、画面共有やコンテンツの配布等も容易になります。その他、学校現場でiPadを使うための管理ツールや機能が追加され、導入の検討がしやすくなる事が期待されています。

講演ではiPadの学校での使用

について、メーカーが考えるビジョンの説明から始まり、iTunes UやPodcast、FaceTime等を小学校で活用した実践例の紹介や、Shared iPadやクラスルームで可能になる内容についても話されました。特にiTunes Uについては、立教小学校のコンテンツ作成方法についての説明もなされ、どの様な手順で授業準備が行われているのかをイメージする事ができました。また、実際にクラスルームを導入するために必要な設備について具体的な質問も挙がり、各校での今後のタブレット端末導入と活用の検討を進

める手掛かりになったと思います。

最後に部会報告で今年度に予定しているセミナーやワークショップの案内がなされ、午後の部は修了となりました。

タブレット端末導入についての検討は各校ここ数年が山場であると思えます。部会としては皆さんと共に、役立つ情報の共有と提案をできればと考えています。

今後ともよろしくお願い致します。



学校図書館部会

主体的に学習する
子どもを育てる学校図書館

藤本 静香 (立教)

午前は、目黒星美学園小学校の和田瑞萌香先生による公開授業(単元名「ふしぎいきもの図かんを作ろう」)が行われた。ここでは、児童が『りこうすぎた王子』(岩波少年文庫 アンドリュー・ラング作 ロバート・ローソン絵 福本友美子訳)に出てくる想像上の生き物「レモラ」についての描写を聞き、その描写から「レモラ」の特徴を捉え、ワークシートに自分が想像した「レモラ」を描く。そして、描いた作品を友達同士で紹介し合うという授業が行われた。

授業をめぐっての話合いは『りこうすぎた王子』は二年生には少し難しい内容であったが、予想以上に児童が作品に興味を示し、楽しそうに作業をしている様子が見られたという意見が出された。また、今回のような想像上の生き物を描かせる



には、二年生ではどのような作品を扱ったらいいかという疑問も出された。そこで、韓国の妖怪「トッケジ」や北欧の「トロール」などを描かせたのもいいのではないかという意見が挙げられた。

また、目黒星美学園小学校の図書室では、どのように図書の授業が行われているかの紹介もあった。この学校では一か月に一回のペースで授業があること。その限りのある授業時間でも、児童が主体的に授業に取

り組めるよう、様々な工夫がなされていることなどが紹介された。

午後は、昨年度の部会活動報告、今年度の活動予定、予算についての説明が行われた。今年度の学校図書部会の研究テーマは、昨年度に引き続き「主体的に学習する子どもを育てる学校図書館」である。今年度も、学校図書館部会の研究会が実りあるものとなっていくようにしていきたい。

部会報告の後は、翻訳家である前沢明枝氏をお呼びし、講演会が行われた。前沢氏は、『エルマーのぼうけん』を書かれたことで著名なアメリカのルース・スタイルス・ガネット氏が来日した際、翻訳を担当された方である。前沢氏は、日本でガネット氏の翻訳を担当したことをきっかけに、彼女の魅力を感じ、ガネット氏の家をたびたび訪れている。その交流を通して、『エルマーのぼうけん』をかいいた女性 ルース・S・ガネット』を執筆された。ガネット氏は現在九十三歳の元気なおばあさまである。今回の講演では、前沢氏の著書の中では紹介し

きれなかったガネット氏の魅力もお話ししてくださった。前沢氏は、スライドで若き日のガネット氏の写真を紹介しながら、ガネット氏がどのような人生を送られ、どのような経緯で『エルマーのぼうけん』を執筆されたのか、そこに至るまでどのようなことがあったのかを詳しく話してください。

前沢氏の講演の後半では、前沢氏が翻訳をされた海外の本についてのブック・トークも行われた。そこでは、前沢氏自信による読み聞かせや、前沢氏が子どもたちに翻訳作品を読み聞かせたとき、どのような反応があったかの説明などがあり、会場は温かな雰囲気にもまれ、大変、充実した講演となった。

学校劇部会

劇上演のための「いろは」

百合岡依子（トキワ松学園）

午前は、保坂弘之先生（成城学園）により、五年D組（二十九名）を対象に『形容詞十名詞』を使って劇

を創ろう」の授業が行われた。「怒りっぽい・気が弱い・ポジティブな」等形容詞と「泥棒・医者・芸能人」等名詞を組み合わせ、さらに「やれやれ・よかった」等から決め台詞を選び、班ごとに短い劇をつくるという内容。約十五分班で相談した後、発表会を行った。「気の弱いアナウンサー」では筆箱をカチンコに見立て、落ち込むアナウンサーを慰める話を創っていたり、他には、遅刻したことを「三十分なんて大したことない」と言って、「大雑把」を表現したり、いやみに対して激怒して「怒りっぽい」を表現したりと、様々な工夫が見られた。授業を通してみんなで劇を創る喜びを感じられたように、また担任の先生によると、普段はあまりコミュニケーションを取りがたらない児童が積極的に話し合いに参加するなど、友達同士が互いの新たな面を知るきっかけにもなったようだ。

授業後の話し合いでは、恥ずかしがって舞台の隅を使ってしまう児童が複数いたことが話題になったが、それに対して、あまり経験のない児童にとって今回の題材はややレベルが高かったこと、回を重ねるごとに徐々に人に見せる意識が芽生えてく

ること、よい表現が出てきたら褒めてやる気を引き出すこと、「隠れるな、前に出る」ではなく観客が前に出ていってもいい；等の意見が出された。成城の加藤校長からは、「劇は非常にデリケートなもので、少しでもマイナスな言葉かけをされてしまうとなかなか表現できなくなってしまうケースもある。みんなが受け入れられる環境を少しずつ整えながら、回数を重ねていくことでコミュニケーション能力や表現力など様々な能力が高まっていく」というお話があった。

午後には、紙芝居鑑賞とワークシヨップが行われた。マーガレット一家の熱血紙芝居師「たっちゃん」こと、川上竜生先生は、午後の研修が始まる前に、校舎の廊下で、高い声で紙芝居の呼び込みをされていた。その後、明るい雰囲気の中で、紙芝居の実演がはじまった。作品名は、『パッハの母』途中から、たっちゃんの読みが続いて、観客も声に出して、早口言葉になつていく。観る大人も思わず笑ってしまう内容で、誰もが楽しく観られる参加型の

作品だった。実演後は、グループで行なうワークシヨップにうつった。たっちゃんには、続いて『さよなら三角またきて四角』を読まれた。この作品は、「すべる」といえば、「こおり」「こおり」といえば、「つめたい」というように、連想する言葉をつなげていく物語形式の紙芝居であった。この作品をもとに、グループごとに連想する言葉をグループの人数分だけ挙げ、



その言葉を画用紙に絵を描き、紙芝居を作成した。各グループで創作した紙芝居をお互いに披露したが、どのグループも、工夫を凝らした笑いのある完成度の高い紙芝居となっていた。

この活動は、児童同士でもできる、言葉の学習にもなる創作活動である。最後に、たっちゃんには、もう一つの作品を実演していただき、笑いと拍手の中で研修が終わった。

外国語部会

小学校における外国語教育のあり方を考える

木下 里紗（青山学院）

今年度第一回目の研修会は、目黒星美学園小学校にて実施された。

午前の部では、四年A組にて英語の公開授業が行われた。授業では、「あなたはどの帽子が好きですか？」の質問に、oneを使った表現で答えることを単元目標として、様々な活動が行われた。始めにお祈りを斉唱し、独自のポスターを使ったフォ

ニックス学習、会話練習など、児童を飽きさせない内容とテンポが進められた。矢崎則子先生とジョン・ロビンソン先生の温かくユーモア溢れるやりとりや語りかけ、それに対して子ども達が笑顔で応えている姿が印象的だった。

授業の後、英語教育についての概要説明と質疑応答の時間を持った。目黒星美学園小学校では、「他者と積極的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成」を目標とし、一年生より週二時間、ティームティーチング形式で英語授業を実施している。特色としては、英語劇に注力しており、スライドの写真からは子ども達が喜びを持って英語と向き合っている様子が見受けられた。最後の質疑応答では、疑問点や感想などを共有したが、多くの方々が子ども達の学ぶ姿や先生方のご尽力の程に心を動かされたようだった。

午後の部では、「宇宙と言語」と題して、石尾誠一氏、山崎直子氏、こうづなかば氏をお招きし、トークセッション形式でお話いただいた。

第一部では、山崎直子氏より、宇宙飛行士としてのご経験について、沢山の美しい写真を含めたスライドと共にお話いただいた。宇宙ではコ



コミュニケーションの殆どが口頭で、顔の見えない状態で行われるため、山崎氏は様々な訓練を受けられたが、この経験を通して、「多様性に富んだコミュニケーションの中では自分が思う以上に伝える必要がある」という事を実感されたと仰っていた。また、「これまでの歩みを振り返ると、どんな経験も無駄ではない事を感じる、この事をこれからも子ども達に伝えていきたい」と力強く話されていた。

第二部では、こうづなかば氏より作品に込められた想いについてお話いただいた。お話の中で見せていただいた作品には、世の中の混沌と人類の希望が描かれており、このような作品を制作するに至った経緯について伺った。また、最後にカール・セーガン氏のペール・ブルー・ドットという映像を鑑賞したが、この映像を通して、こうづ氏は「言葉も勿論大切だが、言語の元となる、伝えたいという気持ちを育てる事も重要だと感じた」と話されていた。

第三部では、参加者からの質問に答える形で、教育をテーマにお話いただいたが、お三方ともに「子ども達が色々な切り口で学び、失敗しながらチャレンジできる場を作る必要があると感じる。その為には大人も学び続けなければいけない。」と話されており、最後に教育者として心に響くメッセージを頂いた。

今回の研修を通して、豊かな学びの時間を多くの先生方と共有する事ができ、感謝である。今回得た学びを目の前の児童に還元できるよう努

めると共に、これからも子ども達のために学び続けなければならないと強く感じた。

音楽部会

子どもが輝ける 音楽を目指して

倉内 祐子 (成蹊)

今年度音楽部会のテーマも、昨年度に引き続き「子どもが輝ける音楽を目指して」である。一人でも多くの子どもが音楽を通して輝くことができるように、更に一年間研究を進めていきたい。

午前の部では目黒星美学園小学校のお二方の先生の公開授業を拝見し、事後研究を行った。目黒星美学園小学校では研究主題を「ともに学び合う子―主体的に学習課題を追求する姿を目指して―」と設定し、全ての授業がその主題を元を実施されていた。近年ない統一された主題に学校とし



ての研修への強い意欲を感じることができた。昨年度二月には呼びかけをいただき、事前に指導案の検討会も開くことができたことは、特筆に価する。その前向きな姿勢に学ぶところが非常に多かった。

まず、矢鋪太郎先生の二年生の授業では「につぼんのうた みんなのうた」という単元で共通教材の「かくれんぼ」を扱い、交互唱の中で歌い方の工夫を探る授業だった。子どもたちはかくれんぼの状況を楽しみ

ながら繰り返し返しの時に強弱の変化をどのようにつけるか、という課題に取り組んでいた。検討会では更に楽しみながら主題に近づけるアイデアがいくつか提示された。矢舗先生の丁寧な子どもの声に耳を傾ける姿勢が印象的だった。

三浦美和子先生は、六年生の合唱とリコーダー合奏の授業を通して、聴き合う中で自発的に参加する姿を示してくださった。聖歌を通して育まれたであろう、成熟した合唱の響きや全体のバランスを感じてパートを移る姿など聴いて判断する姿勢が身につけていることが随所に表れていた。

午後は合唱指導者・指揮者の前田美子先生のワークシヨップを行った。

「子どものやる気を引き出す指導」をテーマとして、授業の中でどのようなことを考えて指導していくのか、実際の曲を参加者で歌いながらサジェスチョンをいただいた。弛まない教材研究に尽きる先生の言葉の数々と、それに留まらない人間教育としての音楽の視点の明確さが参加者の心の中に深く浸み込んでいくような時間だった。音楽の豊かさ、共に歌う喜びを皆が共有できた空間を

創り出してくださったのは、飾らない前田先生のお人柄と音楽へ向かう厳しさに他ならない。最後の南相馬市小高中学校卒業生作詞「群青」は、「前田先生の指揮でもう一度歌わせてください」という参加者の希望で心合わせて合唱することができた感動的な体験となった。

学級経営部会

子ども・保護者との

よりよい結びつきを求めて

清田 雅久（立教）

講演 「子どもとの空気、親との空気を創る」

講師 明星学苑教育支援室長 細水 保宏 氏
今年度は、算数教育でも著名な明星学苑教育支援室長 細水保宏先生をお迎えし、学級経営の視点で講演をしていただきました。

この講演での先生の観点は二つでした。一つは先生ご自身が、先輩から学んだこと。もう一つは、子どもたちから学んだこと。

学級経営に必要なことは、子ども自身の心を学級の中で素直に表現できる空気を創ることである。そのために必要なことは、二つある。一つは、自分の授業を見直すこと。もう一つは、授業力を鍛えることである。例えば、選択肢がある場合、子どもに授業内での自分の立場をはっきり持たせることが重要である。自分の立場、意見を持つことで、より主体的な学びを生み出すことができる。



からである。

また、話し合い活動においても、ほめることによって「価値づける」ことができる。この「価値づける」ことは、「みんなもこうしてね」という裏のメッセージを伝えることになる。注意をすることでなく、褒めることによって価値づけていくことで、授業の雰囲気もよくなっていく。正解の判断も教師が行わず、子ども側に委ねることで、主体性が生まれる。子ども自身が導き出した結論に納得できるからである。

「学び合い」は、相手に対して「付け加えて」いくことである。友達の意見に関わりを持たせることで、話題が広がり、より「学び合う」空気を創ることになる。またその時、二番目の声に注意をしながら学級を創っていくようにするとよい。その際、「どんなクラスにしたいか」という思いがないと、子どもをほめられなくなり、学級経営もうまくいかなくなる。また、子どもに「悪い空気（雰囲気）」、「良い空気（雰囲気）」を感じさせて、学習させることも教師の役割

りである。実感させながら知らせていくと、空気を創る力がついてくる。自分たちで空気が変えられる力もついていくのではないだろうか。

授業力で最終的に大切なのは、教師の人間性である。教師自身が感動する場を持つことで、豊かな人間性につながる学びができるのである。教師自身が味わうことで伝えられる豊かさが増すのである。

最後に先生は、このような思い、考えを後輩に教え、伝えたいと考えられている。それが、子どもの成長、幸せにつながっていくと信じているからである。先輩の技を盗み、真似てみることに。子どもの笑顔が見たいと授業づくりをすることで、豊かな授業力が身につく近道と話されました。

先生のお話は、笑いあり、頷きあり、算数の問題ありと、よどみなく流れ、そして深く心に響きました。また、先生方が、参加する場面もあり、子どもたちの気持ちにもなれたのではないのでしょうか。そして、あっという間に過ぎた時間がより一層貴重に感じられました。

次の日の学級経営、授業にすぐ生かせるような考え、ヒントをいただき、大変有意義な研修となりました。

家庭科部会

家庭科で生活を豊かに

鈴木 宏明 (成蹊)

午前は、まず五年生のサラダ作り
の研究授業から始まりました。女子
二十九名のクラスの担任である、岸
田先生の授業です。この学年の子ど
もたちが二年生の時に一度担任をさ
れているということもあり、授業者
の先生と児童とのしつかりとした信
頼関係が随所に見られる授業展開と
なりました。

調理については各人の経験値の差
が大きいことから、岸田先生は、

「野菜好き？」

と子どもに問いかけました。その後、
「どんなサラダがあるだろう。」

と問うと、子どもたちからは活発な
意見が次々に出ます。シーザーサラ
ダ・ポテトサラダ・中華サラダ・春

雨サラダ・チョレギ・生ハムサラダ・
コールスローサラダ…。

「じゃあ、使われている野菜は何だ
ろうね。」

レタス、トマト、キャベツ、キュ

ウリといった定番の野菜以外にも、
玉ねぎ、ニンジン、トウモロコシ、
ブロッコリー、ヤングコーン、セロ
リ、アスパラ、オクラ…。意見が活
発です。野菜以外にサーモン・生ハ
ム・ツナ・カニ・卵・エビ・リンゴ・
みかん…と次々あがりました。

先生はすでに実施していたゆで野
菜の調理の利点を確認してから、「ゆ
でである野菜を一種は入れる」とい
うしぼりをかけて、ワークシート
にオリジナルサラダのレシピ
を書くように指示なさいまし
た。

どんなサラダ案ができるで
しょうか。事後の話し合いで
は、担任の先生と子どもたち
の信頼関係を評価する参観者
の意見が多かったのと、各校
の家庭科の学習環境や指導上
の悩みなどが語られ、時間が
足りなくなるほどでした。



製菓専門学校で養成にあたられてい
ます。
まず、先生の師範を見たのち、グ
ループに分かれて実習に入りました。
使用器具は多いものの、フロマー
ジュブラン・生クリーム・卵白にグ
ラニュー糖・板ゼラチンにキルシュ
と、シンプルなレアチーズケーキの
一種です。が、その分ホイップパーや
クリーナーの使い方、材料の混ぜ方
など、基本技術が重要なのです。

全員ができあがったクレムダンジュをいただきながら、川内先生が製菓業界の業種別の特徴などについてお話し下さいました。とくに、現在専門学校で若い生徒を育てて業界に送り出す立場として、かつて働いていた現場をより良きものにしようと努力している話には感銘をうけました。小学生女子の「なりたい仕事」第一位が製菓職人（パティシエール）だそうです。厳しい現場の話を知りつつも、夢のある時間を過ごせたことに感謝をして研修を終えました。

お世話になりました目黒星美学園の皆様、実り多き時となりました。ありがとうございました。

学校保健部会

「CAP」(Child Assault Prevention) 子どもへの暴力防止プログラム

いじめ・誘拐・性暴力。子どもが自分の権利を守るには？

秋山 聡美 (成蹊)

今年度、学校保健部会は「子どものからだと心を育てよう」自ら考

え、行動化を目指して」をテーマに部会を進めている。日々、保健室には様々な児童が訪れる。どのような子どもは自ら行動することができるとか。子ども自身の行動変容に焦点を当て、学びを深めていきたい。

午前は、「繋がる深まる学校保健情報共有、疑問・悩みを共に解決！」をテーマにグループワークを行った。各学校一人や二人の養護



教諭が学校保健活動の中心を担っている。それぞれが抱く疑問や悩みについてグループに分かれ話し合いを進めていった。話し合われたテーマは「性教育・健康診断・運動器検診・発達障害・ストレスチェック・食物アレルギー・保険証の扱い・いじめアンケート・防災指導・保護者への対応・エビペンの管理」などさまざまであり、各学校独自の悩みも多くみられた。お互いの考えを伝え合う

ことができ、今後の保健活動において必要不可欠な「繋がり」を生み出す貴重な時間となった。

午後は、NPO法人CAPユニットの講師の方三名をお招きし「CAP」の講演とワークショップが行なわれた。暴力とは、「人の心と体を傷つけること」「人権侵害行為（安心・自信・自由を奪う）」である。CAPプログラムは、人権概念を通して、子ども達が「いじめ、誘拐、性暴力」など、さまざまな暴力から自分を守る方法を学ぶ「参加体験型プログラム」となる。子どもワークショップを体験

すると共に、大人としてどのような関わりが大事になるか、大人ワークショップの内容へと進んでいった。すべての人が持っている大切な三つの権利は「安心」「自信」「自由」であり、これらの権利が取られそうになった時には「嫌だと言う」「逃げ」「相談する」「友だちと助け合う」という基本的な概念に常に立ち戻りながら、ロールプレイやグループごとの話し合いが行なわれた。その中では、子どもたちがよく遭遇するであろう「いいつけるな・告げ口するな」「秘密だよ」と言われたらどうする？という問いかけがあった。「いいつける」とは人を困らせるための行為であり、力になってくれる人に話すという行為は「相談」である。また、秘密には安心できるものと、できないものがある。サプライズなどは安心できるワクワクする秘密だが、それ以外の不安な気持ちになる秘密は、守らずに力になってくれる大人へ相談する必要があるのだ。さらにそのような行動は、被害者のみならず加害者をケアすること、加害者の人権も守るということに繋がるのである。

大人のさりげない言動が、子どもの人権を守ることに繋がることにも

なるのだと改めて感じた。また、具体的な支援方法の提示があり、現場で活用しやすい学びとなった。養護教諭一人で抱え込むのではなく、CAP のようなプロの力を借りることの大切さや頼つていいのだという安心感も得ることができた。今回の研修を通して学んだことを、それぞれの学校で積極的に発信していきたい。

生活・総合部会

新たなものを求めて

大谷 一途（慶應義塾）

午前中は、渡邊智哉先生の一年生の授業を拝見した。一年生のこの時期の授業など見せたくないと思うところであるが、もう既に、学級経営がうまくできていて、子どもたちは、とても落ち着いて、学習していた。自分達が育てているアサガオとマリーゴールド・ヒマワリの様子を比べる授業であったが、子どもたちは、よく観察し、発言して、活発に学習していた。渡邊先生は、観察中の子どもたちのつばやきをも、よく

聴かれています、指導・支援に役立てておられた。子どもの言葉をしっかりと受け止めながら、観察力を高めていく素晴らしい授業であった。しかも、校庭の関係で、一人一鉢育てるのは、今回が初めての試みだったそうである。常に新たな方法を模索しておられる姿勢にも感服した。

午後は、まず恒例のパネルディスカッションである。今年度は、「飼育」「こころ活動」「最近の子ども」の三テーマに分け、先生方には、興味のあるグループに入ってもらった。私が参加した「飼育」では、それぞれの学校または学級で飼育している生物の情報交換が行われ、環境的に好き勝手に飼える生き物が限られているといった悩みなども語られた。他のグループも同様に、良い情報交換や、意見交換が行われたと思う。最後は、お茶ノ水「折り紙会館」館長の小林和夫先生に、季節にちなんだ折り紙の折り方を教えて頂いた。小林先生は、権威的な折り紙教室の講師とは異なり、「誰でも気楽に楽しく折れる

折り紙」を目指しておられる。「角を合わせたら、後は真下をしっかり押さえて、こう伸ばすだけ。」と、我々に視線を向けながら、机に折り紙を置くこともせず、次々見事に折り上げていく。正に何歳になってもできる折り方である。折り紙界は、伝統にこだわり、形式を重んじすぎているようで、それを打破して教えている小林先生が、一番世界的に活躍し



ておられる所が皮肉である。「ずれても構わないから、折り直しをしない。」ともおっしゃり、うさぎ、そこからの変形としての羊、アサガオ、チューリップ、風船、葉脈の入った葉と、次々折っていく。折りながら、折り紙とは、テーブルの紙ナプキンでも、箸入れでも、手軽に折れて、人々に日本の伝統文化を伝えることができるものだと思われたい。

さらに折りながら、数学嫌いは、教師のせい、折り紙などを使った導入を考えることで、もっと楽しく教えられるはずだとか、東日本震災の被災者支援のために、福田元首相夫人が、折り紙を折って、チャリティーにしたとか、広島に世界中から送られる鶴は、五トンにもなり、リサイクルせざるをえない状況にあるなど、様々な折り紙に関する蘊蓄も伺うことができた。

また、一つの折り紙の折り方から、変形を考え、常に新たなバリエーションを考えておられることも分かった。我々も常に新たな可能性を求めて励んでいかねばならないと思った。

学校紹介

教職員の力は学校の支え

目黒星美学園小学校

校長 小島 理恵

「青少年を愛するだけでは足りない。青少年が愛されると感じられるように愛さなければならぬ。」

(ドン・ボスコ)

これは、本校の創立者ドン・ボスコの時代から脈脈と流れている「サレジオの心」です。十九世紀、イタリアで活躍した教育者であり、「青少年の父」と仰がれたカトリック司祭ドン・ボスコは、若者たちが学業を終えた後、自ら生計を立てながら「良きキリスト者、誠実な社会人」へと成長することを願っていました。

ドン・ボスコは、自身が創立した修道会の名称を、十六世紀にフラン

スで人々に崇められた司教フランシスコ・サレジオにちなんで「サレジオ修道会」としました。それは、司教の柔和と宣教精神、そして人々への慈愛に溢れる姿に共感したからです。ドン・ボスコはその生き方に倣い、子ども達を愛し、彼らのためにすべてを捧げ尽くしました。この精神は、後継者たちによつて海を渡り、今では世界百三十カ国以上の国々に広がっています。

本校の併設校として、世田谷区に目黒星美学園中学高等学校があります。その他、都内では赤羽に、そして静岡、大阪にも姉妹校があります。その全てに共通して掲げられる教職員の「サレジオン・カラー」があります。五年前、これ

らの姉妹校の教職員代表が一堂に介し、ドン・ボスコの学校に奉職する者の姿について話し合い、まとめたものです。「私たちサレジオンは①愛されていると感じられる関わりを目指していく②青少年教育に情熱を燃やしていく③青少年と共に

歩んでいく④家族的精神を生きていく⑤快活、喜び、柔和、慈愛を生き抜いていく⑥青少年のために祈る：それは、私たちサレジオンも神様から愛されているからです」どれもが創立者の特徴を表しています。

カトリック・ミッシヨンスクールである本校の一日はお祈りで始まり、お祈りで終わります。教職員も同じです。月曜日の職員朝礼では、このサレジオン・カラーを「祈り」として唱えます。皆が同じ心で子ども達の前に立つことができれば、大きな力になると確信しているからです。



「いつも子どもと共に」これは、本校のキャッチコピーです。我々教職員は、ドン・ボスコの言葉をそのまま使い、これを「アシステンツァ」（アシスト）と呼んでいます。子ども達一人ひとりの傾き、望み、悩みなどを知ることにより、彼らの成長に寄り添うことができます。従って、授業中はもちろん、休み時間にも子ども達

の中にいるように努めながら、信頼関係を築くよう心がけています。なぜなら、「愛情がなければ信頼はなく、信頼がなければ教育はない」（ドン・ボスコ）からです。

去る六月に本校を会場に行われた一斉研修のための長い準備期間を通して、教職員がこれまで以上に一つになり、同じ方向に向かって大きく前進できたことを実感しています。今後、授業研究に益々力を入れると共に、子ども達のために尽力する熱意を新たにしながら、より良い教育の場を築いていきたいと思えます。



2010 年代の教育宣言

今や、地球規模で激動する 2010 年代を迎えました。私たち私立小学校は、著しい社会変化と科学技術の高度化が進展する時代の中で、建学の精神を継承するとともに伝統を重んじ、その使命とする理想の教育をめざし、誇りをもって初等教育の先駆的な実践を世に問うてきました。

21 世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。その一方で「心」の時代でもあります。私たち私立小学校は、個人の自由と人権および児童一人一人の個性を尊び、その内なる可能性を児童愛をもって引き出す方法を実践・探究し、未来を切り拓いていく基礎的資質と心豊かな人間性を育成します。

併せて、真の世界平和と持続可能な自然環境の維持のために、広い視野をもって考え、共感する力を身につけた児童を育成します。

そのため、私たち私立小学校は、伝統と特色ある教育をさらに充実させ、私学人としての自覚に立ち、お互いに協力結束し磨き合い、わが国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2010（平成 22）年 6 月 11 日

日本私立小学校連合会